

国際交流活動の顕彰 国際交流基金賞・国際交流奨励賞

1973年度に「国際交流基金賞」、翌74年度に「国際交流奨励賞」を設け、以来毎年、学問、芸術その他の文化活動を通じて、わが国に対する諸外国の理解を深め国際相互理解を増進することにより、国際文化交流に特に顕著な貢献があった個人、団体等に対しその功績を顕彰している。2003年度は、内外各界の有識者から推薦のあった個人および団体について、選考委員会(浅尾新一郎、石井米雄、小塩節、粕谷一希、中村紘子、宮内義彦、山折哲雄、山崎正和、各氏)での審議を経て受賞者を決定した。

国際交流基金賞(副賞各500万円)

●石澤良昭氏

上智大学外国語学部教授

40年以上にわたり東南アジアにおいて文化財の調査に携わり、文化遺産保護に尽力してきた。特記すべきは、内戦中のカンボジア密林でアンコール遺跡群の発掘・保存・修復に現地の研究者らと協力して携わり、同遺跡群が世界遺産に登録される契機をつくったことである。東南アジア史の再発見と国際的な文化・学术交流への多大なる貢献である。



経歴

- 1961 上智大学外国語学部フランス語学科卒業
- 1974～79 フランス国立高等研究院にて古代カンボジア碑刻文学研究(1974～75、78～79)
- 1977 中央大学にて文学博士号取得、鹿児島大学助教授
- 1982～ 上智大学外国語学部アジア文化研究室教授
- 1982～ 上智大学アンコール遺跡国際調査団団長
- 1984～93 上智大学アジア文化研究所所長および外国語学部アジア文化研究室長
- 1992～93 東南アジア史学会会長
- 1992～ ユネスコ国際諮問委員会委員
- 1992～ 文化庁アジア・太平洋地域文化財建造物保存修復協力委員会委員
- 1995～98 上智大学外国語学部長

受賞歴

- 1987 大同生命地域研究奨励賞
- 1991 外務大臣表彰
- 1992 第2回コムソフィア賞(上智大学)

1998 サハメトリ章(カンボジア王国シハヌーク国王殿下より)

著作

- 『カンボジアの文化復興：アンコール遺跡および伝統文化復興の研究・調査』(第1～19号)(共編著)(上智大学アジア文化研究所、1989～2002)
- 『アンコール・ワット：大伽藍と文明の謎』(講談社、1996)
- 『アンコール・ワットへの道：クメール人が築いた世界文化遺産』(共著)(JTBキャンブックス、2000)
- 『アンコール・ワットの解明』シリーズ1～4(共著・監修)(連合出版、2000～2001)
- 『原史東南アジア世界』(岩波講座「東南アジア史」第1巻)(共著)(岩波書店、2001)
- 『東南アジア古代国家の成立と展開』(岩波講座「東南アジア史」第2巻)(編著)(岩波書店、2001)
- 『アンコールからのメッセージ』(山川出版社、2002)
- 『東洋の心 西洋の心』(共著)(ユーラシア旅行社、2002)

●ヨーゼフ・クライナー (Josef Kreiner) 氏

ボン大学日本研究所所長

欧州のみならず世界の日本研究界の第一人者。沖縄やアイヌなど日本の各地域の社会・文化研究に優れ、多角的な視野をもった考察をおこなっている。1987年に国際交流奨励賞を受賞しているが、その後、ドイツ・日本研究所所長を8年間務めるなど、奨励賞受賞後の活躍はさらに目覚ましいものがあり、国際交流基金賞を授賞するものである。



経歴

- 1961～63 東京大学東洋文化研究所研究生
- 1964 ウィーン大学にて博士号取得
- 1968 ウィーン大学文学部で教授権取得
- 1971～77 ウィーン大学主任教授、同大学日本研究所所長
- 1974～79 ヨーロッパ日本研究協会(EAJS)会長
- 1975～76 国際交流基金フェローとして訪日
- 1977～ ボン大学教授、同大学日本研究所所長
- 1981～88 ボン大学附属東洋言語研究所所長(兼任)
- 1988～96 ドイツ・日本研究所所長
- 1998～ ボン大学アジアセンター代表

受賞歴

- 1987 国際交流奨励賞
- 1995 沖縄文化協会賞(第17回比嘉春潮賞)
- 1995 第14回山片蟠桃賞受賞
- 1996 ドイツ連邦共和国功労勲章一等功労十字章
- 1997 オーストリア共和国科学芸術功労一字章第一等等級

著作

- 『南西諸島の神観念』(共著)(未来社、1977)
- 『東アジア経済圏における九州・沖縄』(共編著)(ひるぎ社、1995)
- 『ケネルの見た日本』(日本放送出版協会、1996)
- 『地域性からみた日本：多元的理解のために』(新曜社、1996)
- 『日本民族学の現在：1980年代から90年代へ』(新曜社、1996)
- 『黄昏のトクガワ・ジャパン：シーボルト父子の見た日本』(編著)(日本放送出版協会、1998)
- 『阿蘇に見た日本：ヨーロッパの日本研究とヴィーン大学阿蘇調査』(自然と文化阿蘇選書：12、一の宮町史、2000)等多数。

国際交流奨励賞(副賞各200万円)

・土日基金

トルコと日本の友好協力関係の拠点として、1993年トルコのアンカラに創立され、1998年完成された土日基金文化センターにおいて、映画上映、展示会、講演会をはじめ、多彩な文化行事の実施等の活動を通じて日本文化紹介に多大なる貢献を果たしている。日本語教育にも力を注いでおり、日土友好のシンボルとして、今後一層の活躍が大いに期待される。



沿革

- 1993 スレイマン・デミレル大統領(当時)のイニシアティブで、タイヤル・サドクラル閣税・専売大臣(当時)を理事長として発足
- 1996 文化センター起工式
- 1998 土日基金文化センター完成(トルコ側が敷地を確保するとともに建設資金の大半を調達し、日本の官民の協力を得て開館に至った)
- 2000 日本語講座開講
- 2001 日本庭園造成完了

活動内容

トルコにおける土日両国の交流活動、友好関係のさらなる発

展を目的としている。土日婦人友好文化協会、土日友好協会、JICA帰国研修員同窓会、土日留学生協会、日本文化研究連帯協会といった既存の日本トルコ友好5団体を傘下においている。

土日基金が設立運営する文化センターは1万平方メートルの敷地に、大ホール(450名収容)、セミナーホール(80名)、展示室、茶室などを備え、開館以来これまでに、和太鼓公演、日本舞踊公演、土日学生会議、日本のマクロ経済に関する講演会、日本映画上映会、日本建築写真展、日本語弁論大会など各種の文化行事を実施したほか、日本語講座も開講、活発な活動を続けている。さらに、日本関係の多数の蔵書を有する図書館も運営し、一般への閲覧やトルコにおけるほかの日本語教育機関などの利用に供している。

・加藤幹雄氏

財団法人国際文化会館常務理事

長年にわたり米国および東南アジア諸国を中心に、諸外国との間の文化交流の実務に携わってきた。日本の代表的な国際交流機関であり、米国の文化交流機関や大学などのわが国における拠点としても重要な役割を果たす財団法人国際文化会館において、文化交流事業運営責任者として、世界的規模での知的交流・相互理解に多大なる業績を挙げている。



経歴

- 1959 早稲田大学政治経済学部卒業
- 1959～ 財団法人国際文化会館に勤務
- 1961～64 フルブライト交換学生として米国ブランダイス大学に留学
- 1962 米国ジャパン・ソサエティ(ニューヨーク)で実務研修
- 1964 財団法人国際文化会館に復職
- 1979 財団法人国際文化会館常務理事

そのほか、日本アспен研究所スペシャル・アドバイザー、同常務理事、財団法人英語教育協議会評議員理事、などとして国際交流に貢献。

受賞歴など

- 1972 ウィッテンバーグ大学名誉学位取得
- 1993 外務大臣表彰
- 1994 米国ブランダイス大学より「フェロー」称号取得

訳書など

- 『翻身：ある中国農村の革命の記録』(共訳、平凡社、1972)
- 『コモン・コース：開かれた政治を求めて』(共訳、サイマル出版、1977)

- 『破滅への道程：原爆と第二次世界大戦』(TBSブリタニカ、1978)
- 『日本：二百年の変貌』(岩波書店、1982)
- 『21世紀は個人主義の時代か：西欧の系譜と日本』(サイマル出版会、1991)
- 『リーダーシップの本質：ガードナーのリーダーの条件』(ダイヤモンド社、1993)
- 『日本への疑問：戦後の50年と新しい道』(サイマル出版会、1995)
- 『日本と東アジアの隣人：過去から未来へ』(岩波書店、1999)

●極東国立総合大学付属東洋学大学

歴史と伝統を誇る日本研究拠点機関として、ロシア沿海地域における日本語教育推進、日本文化理解に大きな影響力をもっている。また、日本をはじめとする近隣諸国との学術・芸術交流活動にも積極的に取り組んでおり、アジア太平洋地域と連携した大学教育の発展に努力してきている。

活動内容

極東唯一の日本語教育機関としてスタートし、以来100年を超える歴史の中で日本語教育・日本研究の拠点として重要な役割を果たしてきている。実用的な人材育成を目的とした少数精鋭教育を重点的に行っており、同大学で日本語を専攻した卒業生は、日本語教師、通訳として活躍しているほか、地方行政府、市役所、ロシア外務省などで知日派として多く活躍している。北海道函館市にある東洋学大学分校においては日本人学生を本校に留学させるなど、日露相互理解にも大きく貢献してきている。

日本語学部は、早稲田大学ほか9大学と友好提携関係にあり、学生および教師の相互研修、共同研究、インターネット・ビデオ会議などを実施している。

ウラジオストク日本センターの創設にあたっては、同大学の敷地を無償提供し、極東ロシアにおける日本文化理解促進にも積極的に協力してきている。



沿革

- 1899 前身となる東洋学院が創立
- 1920 東洋学院を基礎に極東国立総合大学が開設
- 1936～56 一時閉鎖
- 1956 極東国立総合大学再興
- 1962 東洋学院が極東国立総合大学付属東洋学部として再興
- 1993 国際交流基金より日本研究拠点機関として認定
- 1994 極東国立総合大学付属東洋学大学に改組
- 1996 ウラジオストク日本センター創設に協力

国際交流基金地域交流振興賞

国際交流基金では、地域における国際交流事業を通じて国際相互理解・友好親善の促進に功績があり、さらに今後も引き続き貢献が期待される国内の団体・個人を顕彰するため、1985年度より「地域交流振興賞」の授賞を行なっている。第19回となる2003年度も、120件あまりの候補から、有田典代、池谷貞夫、榎田勝利、勝又英子、佐々木雅幸、田村孝子、湊明弘の各氏による選考の結果、下記の3団体が受賞した。授賞式は、2004年2月9日に国際交流基金国際会議場にて関係各界の方を招いて行なった。

国際交流基金地域交流振興賞(副賞各150万円)

• アーティスト・イン・レジデンス「美濃・紙の芸術村」実行委員会(岐阜県)

代表：石川道政氏(委員長)

アーティスト・イン・レジデンス「美濃・紙の芸術村」の特徴は、1300年もの歴史を有する伝統工芸「美濃和紙」を素材としている点、市民を中心に組織された実行委員会やボランティアが、通訳、広報活動、子ども達とのワークショップ実施などを企画運営し、アーティストの制作活動を支援、国際交流の輪を拡げている点にある。帰国後も和紙を素材とする作品制作に意欲を見せる海外のアーティストを市民の創意工夫で育む一方で、市民自身もアーティスト達が発揮する伝統工芸の粋組にとらわれない自由な発想に触れ、新たな活力を得ている。

• 武生国際音楽祭推進会議(福井県)

代表：上木雅晴氏(理事長)

武生国際音楽祭推進会議は、本音楽祭の企画、期間中の運営を全て市民の手作りで行なう市民ボランティア組織として、現代音楽も含めた質の高いプログラム構成により現在の音楽祭の形を築き上げてきた。音楽祭の期間中、主会場となる武生市文化センターのほか、学校、寺社、レストランなど市内の至るところで演奏会が開かれ、街全体が音楽一色に包まれる。高い水準の演奏に親しみ、海外から来日した演奏家や作曲家と交流する楽しさをより多くの市民と分かち合いたい、という武生国際音楽祭推進会議の市民ボランティアの情熱が、世界レベルの音楽祭を支えている。

• 北方圏国際シンポジウム実行委員会(北海道)

代表：青田昌秋氏(委員長)

紋別市で開催される国際流水シンポジウムには国内外の研究者が集い、流水やオホーツク海に関する学術研究成果を発表する場となっている。これを裏方として支える北方圏国際シンポジウム実行委員会には、各界の市民が結集、300名余のボランティアも加わり、18年間にわたり街をあげてシンポジウム運営を支えている。期間中、海外研究者の地元学校訪問などが企画され、草の根国際交流の舞台ともなっている。地域の特性に根ざした国際的な学術交流を市民が一丸となって支えながら、市民自らも国際交流を楽しみ、地域の風土を見つめなおしている。



アーティスト・イン・レジデンス「美濃・紙の芸術村」



武生国際音楽祭



北方圏国際シンポジウム

国内における国際交流活動の振興

国内における国際化意識の高まりを背景に、国際交流相談室を設けて、以下のようなさまざまな形で支援することにより、国内の国際交流活動をより活発にし、裾野を広げる事業を推進している。基金は、これらにより形成されたネットワークを通じて、人物交流、芸術交流、メディア交流の各分野で実施する国内向けの国際交流事業に反映させ、また、各種の助成プログラムにより、これらの団体の活動を支援している。

1. 国際交流活動に対する相談

国内で国際交流活動を行なっている個人または団体に各種情報を提供するとともに、その活動の支援のため基金の助成プログラムや基金外の助成財団のプログラムを紹介している。

2. 『文化事業通信』の発行

国際交流の現場で活躍している関係者へのインタビュー、国際交流に関するさまざまなノウハウや海外レポート、そして基金・在京大使館・在外公館・国内諸団体が国内外で行なう各種国際交流活動などの情報提供を通じ、国内の国際交流事業を促進することを目的とし、『文化事業通信』を年3回発行している。

3. 「国際交流事業企画セミナー」等の開催

2003年度は、財団法人サントリー文化財団と共催で「地域文化と国際交流を考えるワークショップ：地球が舞台」を全国3か所(長野県飯田市、富山県利賀村、佐賀県武雄市)で開催し、全国および当該地域から集まった参加者が主体的に参加して地域における国際交流の意義などにつき意見交換、情報交換を行なった。

また、横浜市との共催で「都市のみらいを開く」ワークショップならびにシンポジウムを開催し、文化芸術が創出される過程で発揮される創造力や革新力といった動的なダイナミズムに着目した都市再生計画について討議を行なった。

4. 国際交流会議助成

国際相互理解の促進を目的として開催される国際会議等に対し、その開催経費の一部を助成する(詳細はP. 63「国際交流会議」の項を参照)。

5. 後援名義の付与

国際文化交流の推進に寄与する事業(公演、展覧会、映画会、セミナー、講演会、人物交流事業等)に対し、後援等名義の使用を認め、支援している。

2003年度は84件実施した。



地球が舞台